

第27回

「五流交流のつどい」報告

担当流派・喜多流 中村 佐千夫

令和6年3月9日(土)、磯子区民文化センター・杉田劇場

において、横浜能楽連盟主催、横浜市にぎわいスポーツ文化局の共催、横浜市芸術文化振興財団の後援を得て、「第27回五流

交流のつどい」が開催されました。出演番数は35番(演目別番組数は素謡10、連吟6、仕舞19)、延べ出演者数は258名(実参加者数は171名)でした。

また、特別招待出演として、山梨学院大学寛松会の中国からの留学生3名とリーダーの先生

お1人、合計4名の方が遠くからお運びくださいました。

ご参加の方々や理事の皆様の応援をいただき、今回のつどいの運営を無事終えることができました。

横浜能楽堂が令和6年1月から2年半の大規模改修に入り、当連盟でも、今大会から別の会場での開催を余儀なくされました。2年前から新しい舞台を求めて、港南区・磯子区・川崎能

楽堂等、他5か所ほど回りましたが、最終的には当時の馬場会

長のご尽力で、JR根岸線新杉田駅前にある「磯子区民文化センター・杉田劇場」にて2年半にわたり開催できることになりました。

ホールはショッピングモール

の5階(310席)で、リハールサル室は4階、衣装の着替え室も4階・5階に設営しました。立派な松羽目幕も用意されています。所作台を並べた能舞台はプロにお願いし、手際よく短時間で設営できました。皆様にご協力いただき、有難く厚く御礼申し上げます。

私事で恐縮ですが、幼い頃私は山手線駒込駅から徒歩4分の所に住まいしており、自宅から3分の所に「染井能舞台」がありました。元を正せば、加賀藩前田家から染井の松平邸に移されたものです。その駐車場は近隣の子供達の遊び場でもありました。そして小学5、6年生になると、染井能舞台の狂言鑑賞会に招待され、綺麗な鏡板も見ました。後にこの能舞台一式が

横浜能楽堂に移設され、時も場所も違えたこの再会に、縁を感じておりました。横浜能楽堂の本舞台の鏡板に当分お目にかかれな残念至極です。工事が無事に早く終わることを祈っております。

第40回

「横浜五流能楽大会」報告

担当流派・金剛流 道明 辰雄

令和6年10月12日(土)、10

月とは思えぬ陽気の中、「第40回横浜五流能楽大会」が、今回2回目となる横浜市磯子区民文化センター・杉田劇場で開催されました。

出演本数は、素謡10番、連吟5番、独吟4番、独調1番、仕舞18番の計38番で、延べ228名の方々が参加されました。10時30分に担当流派金剛流の素謡「龍田」で始まり、最終の仕舞3番と附祝言「高砂」までで、

終演時間16時58分と、予定時間より少々早く終了いたしました。

今回は、前回の大会後に要望のありました隅柱を四隅に設置いたしました。舞台の広さがわかりやすくなったと好評を得ました。杉田劇場での開催は2

回目とあって慣れてきたせいか参加の各流派の皆様も出演の2番前には所定の場所に集合されており、舞台の入退場もスムーズに進んで、時間を短縮することができました。

杉田劇場には切戸口がないので、退場時の出演者のお顔の表





物や会場の案内図等を提供していただき、活用させていただきました。これらの資料等は、今後の運営ノウハウとして次の担当流派の方に引き継いでいきたいと思います。今回の運営スタッフとして参加された方々か

らも、運営に当たったの改善の提案が出されました。理事会において協議し、今後の大会に生かしていきたいと思っています。

また、今大会ではPRの一環として以前作成していたチラシを、再度作成することとなりました。作成に当たっては前理事安田様のお力をお借りし、何とか完成することができました。感謝いたします。

大会進行に当たり、何かと行き届かない点があったかと思いますが、参加者の皆様、理事の方々、金剛流スタッフの皆様の協力で、無事終了することができました。心より感謝申し上げます。有難うございました。

「忠度」

観世流 一坂 洋三

私は50半ばで初めて謡に触れ、爾来20余年謡曲を趣味にしています。未だに声は軽く、謡本に首っ引きで、節回しに四苦八苦している初心者です。

10年程前、『忠度』を習いました。それまでは、平家の公達を主人公とした「修羅物」ほどの曲も、前場は公達の優美優雅さを、後場は死後に堕ちた修羅道の苦患の様子を心掛けて謡えば

よいと単純に考えていました。そして忠度を、平家一門が都落ちする大混乱の最中、一人都に引き返して和歌の師藤原俊成に「何とか私の歌を勅撰集に入れてください」と泣き込むような、自己中心的で軟弱な公達とイメージしていました。しかし謡いこんでいくと、『忠度』はそんな単純な曲ではないことがわかってきました。

世阿弥は風姿花伝で修羅について「源平などの名のある人の事を花鳥風月に作り寄せて、能良ければ何よりもまた面白し。これ、ことに花やかなる所有りたし。」と書き、更に申楽談義で「通盛・忠度・義経三番、修羅がかりにはよき能なり。この内忠度、上果か。」と言っています。すなわち『忠度』は、修羅物の中でも世阿弥自賛の曲なのです。

忠度の実像は、熊野別当の娘を母とする清盛の異母末弟、熊野育ちの大力無双の剛の者、一の谷合戦では西の手の大将。また、俊成に師事して歌人としても名をなす文武両道の人。岡部六彌太忠純に打たれた時は41歳の壮年でした。

世阿弥は『忠度』の作能に当たり「千載集」に採られているさざなみや
滋賀の都は荒れにしを

昔ながらの山櫻かな
ではなく、

行き暮れて

木の下蔭を宿とせば

花や今宵の主ならまし

を採り、この歌を三度（前シテ・ワキ・地からシテ）詠わせています。更に「花」という言葉が18か所に配されています。世阿弥がこの曲のテーマを「花」としたからでしょう。その「花」とは、忠度の武人としての花、和歌の達人たる文人としての花、そして肉体が減びても残るのはその人の花であると…。すなわち、儂いこの世が旅の宿ならば「花こそ主なりけり」と言い切っているのだと思います。

こう考えると『忠度』の詞章がツヨ吟ヨフ吟交錯しているのも、修羅の苦患や怨みを述べることがないのも納得できます。

これからも「花」を追究して『忠度』を謡っていきたいと思います。

稽古の面白さと

舞台発表

宝生流 坂井 茂徳

私は学生時代に宝生流の部活に入りましたが、卒業後は離れており、ほぼ半世紀ぶりの2020年6月から、宝生流能

楽師和久太郎先生に謡の稽古をつけてもらうことになりました。2022年6月からは仕舞も習っております。

謡では、先生から「体（内部の力）を使って謡う」「息の流れで言葉を運ぶ」と指導されます。仕舞では、「腰を入れて水平に大仏のように」「視線を落とさず常に水平の空間をしっかりと見る」「腰から動き出す」「舞が早く着いてもその場所ですっとして動かないで待つ。彫刻のように動かないことも一つの芸になる」など、とても印象深い説明をいただきました。これらは稽古の時には理解できたとおもっても、実際、体はそのようには動かせませんし、ましてや静止もできません。しかし、謡と仕舞の稽古は面白いので、稽古を積んで「素人の自分でもやれるようになりたい」という願望があります。

初舞台は2021年2月の名古屋能楽堂で、「鶉之段」の独調をやらせていただきました。まだ入門して8か月しかたっていない時の挑戦でした。謡のスピードが速くなってしまい、息継ぎが短くて息苦しさに耐えながらの苦しいものでした。この発表で、謡の「拍子と呼吸」の問題に立ち向かわねばという気持ちになりました。また、

佐渡島訪問記

喜多流 河村 公二

2024年6月の発表会での「敦盛」の独吟は無本でやる予定でしたが、練習不足のため、当日に謡本を見てやることにしていたきました。しかし、見台に謡本がありながら、前を向いて謡い始めてしまい、案の定途中で言葉が出てこなくなつて、謡本の当該箇所を探すというとんでもない大失敗をしました。無本なら途中で言葉が出てこなくなつても先生が助けてくれます。他にも苦い経験があり、空回りしているようで、舞台発表では楽しむ余裕などありませんでした。それでも、素謡「半蔀」のシテ、「三輪」のワキ、「誓願寺」のワキを務めた時には、ある程度は日頃の練習の成果を出せたと思っています。

私はそもそも練習が好きで、試合や発表は苦手でした。けれど、能楽という「芸」に素人ながら挑むには、舞台発表は大事なことなのでしょうね。現在75歳になりました。この年齢で「没頭できる」趣味が一つ増えて、とても嬉しく思っています。今年も、皆様との舞台での交流を楽しみにしております。

席ではよく謡が聞こえたと言います。

私達浜友会は、昭和14年に横浜で創業したばねメーカー「日本発条」の元社員で構成している社中であります。創業二代目社長・坂本寿氏（故人）が50年ほど前、喜多流能楽師友枝昭世先生（2008年人間国宝認定）のご指導を得て『謡』を楽しんでいたようで、その会が浜友会であり、今も変わらず友枝先生にお世話になっております。

さて、本稿でご紹介するのは、7年前、浜友会メンバーで民衆能として浸透している佐渡の能楽を遊学した、2泊3日の旅行のご報告であります。

佐渡は、金銀の地下資源に恵まれて幕府の直轄地（農民の納税（米）負担が軽い）となり、1604年初代佐渡奉行として派遣された大久保長安が能楽師の一行を連れて来たことから、以降能楽の伝統を守り続けてきたようです。また能楽はその精神性から江戸時代には武士に広く愛好されてきた歴史がありま

激でした。

以上、佐渡の民衆能の訪問記ですが、横浜の能楽愛好者の皆様、多くの寺社の能舞台見学を兼ねて、佐渡島巡りをお薦めします。

なお、令和5年11月より浜友会と洋謡会が合流し『濱友会』と改称しております。よろしくお願ひいたします。

能の精神を考える

金剛流 生沼 哲

能を始めたのは、2年前の2023年1月からになる。既に娘が能を習っており、その発表会へ足を運ぶが、睡魔に襲われる。「これは私が能に無知だからだ。自分が習えば退屈どころか奥深さにも触れられるのでは？」という思いが頭によぎった。これが能を習おうと思った契機である。

これまでに田村（キリ）、駒の段、狸々、熊野（クセ）、巴の5つの仕舞に取り組み、今ではすっかり熱心？な弟子と自負する。何れも思い出深い、特に熊野が印象に残っている。能の懐に僅かに触れたような気がするからだ。

それまでの仕舞とは異なり、これ以上削れないところまで動

作が削られている。さらに、謡と舞との直接的な関係も見出せない。先生からは常々「頭で舞わないよう」と指導をいただいているが、これこそ、頭の中で「右手上げて、左手下げて」などと考えて舞えば、手旗信号の真似か、ロボットのダンスを披露しているようなものだ。また動きが少ないということは、静止時間が長いということでもある。先生から「静」の状態の大切さも指導をいただいている。熊野の「静」は、ある動作と別の動作の間の「静」ではなく、まるで「静」が対峙しているようだ。

これらの課題に取り組みことで、能の精神というものを考えるを得ない状況となった。私なるの解答は、当時読んでいたインンドの聖典の一つと言われる「バガワッドギータ」に見出した。その中には解脱の二形態が記されていた。一つは、行為が意識の表面から消え、行為は純化され、行為は無為に変わる。もう一つは、無限の行動力を内に秘めながら、一切の行動を停止する状態。例えれば、蒸気を封じ込めれば、計り知れないエネルギーがこもる状態である。前者は、行為をしながら行為をしない境地、後者は、何もしないのに活発な行動を展開する境

地と言え。

これらの表現が、先の課題に対する究極の解答のように思われ、この果てしないゴールに向かって、少しでも近づくことが求められているのではと思う。能は武士のたしなみの一つだったようだが、能と対話することは、自分との対話につながる。これが、私にとっての能の最大の魅力である。

稽古の楽しみ

金春流 大山 三恵子

私が仕舞のお稽古を始めたのは、横浜能楽堂「初めての謡仕舞教室」でした。稽古は10回、10回目は横浜能楽堂本舞台での発表会でした。連吟「鶴亀」、仕舞は「狸々」を舞いました。その後「指導くださった金春流能楽師山井綱雄師社中に入門しましたが程なく都合で3年間休会し、その後も都合で2か月休んではまた休み。(たかが稽古・されど稽古)の思いで続けてきました。

稽古では鬼にも若武者にも、高貴な女性にも、なったつもりで雑事を忘れ、自分をも忘れ、集中する澄んだ時間があります。稽古を始めて、楽しみは能を

観ることから能に関する本を読むこと、能装束を見る、さらに

能のふるさとを訪ねる旅へと広がりました。中でも「三井寺」竹生島と「三輪」の大神神社から石上神社までの山辺の道を歩いたことが心に残ります。

また、平家物語と源氏物語谷崎本を読破できたことも稽古の賜物かと思えます。

横浜能楽連盟に入会して「横浜五流能楽大会」「五流交流のつどい」に出演するようになる、それまで師匠の謡で仕舞をしていたのですが、今度は地謡も自分たちでしなくてはならなくなりました。とにかく必死で覚えて舞台に並びました。このことがとても勉強になりました。シテもまた仲間の地謡を信じて舞い、地謡はシテの動きに合わせて謡う、シテと地謡双方の気持ち重なる心地よさ、素人ならではの達成感があります。そして連吟は他の教室の皆さんと地頭に声も気持ちも揃えて皆で謡います。地謡は能楽連盟に入会していなければ得られない経験でした。謡がとても楽しくなりました。

昨年末、謡本を声に出して読む「素読」を勧めてくださいる方があり、始めたところです。まず教えていただいたように、初めは言葉の意味は考えず文字を



▲大山神社社殿

追って読み、これを何度か繰り返すうち分かる言葉が増えて前後がつながり、内容が分かってきました。新しい楽しみです。これからも、稽古から楽しみを広げていきたいと思えます。

謡と私

下掛宝生流 藤原 功

社会人になって2年目に大阪の本社勤めになり、無理やり謡の会に引き込まれた。会社には京観世井上家のお弟子さんが指導にみえており、自分も稽古する気になった。4年後東京に転勤、参加した住友連係各社の謡の会で小島一房師の知遇を得て稽古に通うこととなった。この方は後に人間国宝になった武田多加志師宅に住み込み修行をし

ていて、独立後は故郷岐阜に戻り活躍なさっている。いつだったか、岐阜でイベントがあった時、土蜘蛛を演じていらっやした。偶々NHKの放送で観たのだ。嬉しかった。

武田先生の舞台は地下鉄方南町より北に徒歩数分。ここで謡と仕舞を稽古した。仕舞はいくつになってもひよこひよこ歩きが治らない。月例会は大曲の観世会館。都電がごとごと。その頃から仕事に責任ある年齢になり、稽古を辞めざるを得なかった。でもその間には朝早くのラジオ放送を聞く努力をし、テープに落とし何度も聞いた。

定年間近、関西のある関連会社で働いていたが、あの阪神大震災で人員合理化をせざるを得ず、責任を取って退職をした。だがその間、単身赴任の気楽さで京都や奈良のお寺さんや山歩きを楽しんだ。横浜に帰ってきたらもう20年近く、夢幻の記憶となつたが、奈良京都の山々、お寺さんを思い出す。謡の舞台にも馴染みがある。特に西山の勝持寺には何度かお参りした。桜で有名だが、西行法師が出家したところとか。剃髪の際、鏡に使ったとかいう石もあった。また桜の頃には、花の吉野やその先にある奥吉野までは人々は集うが、さらに先の西行庵まで足

を延ばす人は今でも稀で、西行さん、日々の生活はどうしたのかなとも思う。でも、この若清水は本当においしかった。「風になびく富士の煙の空にきえて行方もしらぬ我がおもいかな」

「心なき身にもあわれは知られけれ鳴たつ澤の秋の夕暮れ」西行さんは好きな方だ。東北への旅の途中、駿河か相模のどこかで詠んだこの歌は、神奈川県人の私にはじわっと心にくる大好きな歌である。

縁あって、ここ数年前から町内の公民館で下掛宝生流の藤田忠弘師範がなさっている峰謡会に加入して稽古を再開し、月2回の謡の稽古を楽しんでいる。



能楽堂だより

令和7年度の公演案内

令和7年も引き続き、OTABISHO 横浜能楽堂がオープンしています。

また、「つながる、つながる」をコンセプトに横浜市内各所で能狂言の公演、各種ワークショップ、レクチャーなどを開催いたします。

現在決定している今年度の公演は次の通りです。

「横浜狂言堂―港南公会堂編―」

6月8日(日) 午後2時開演

会場 港南公会堂

お話し 野村万之丞

狂言「萩大名」(和泉流) 野村万蔵

狂言「梟山伏」(和泉流) 野村眞之介

全席指定 2千2百円

チケット発売 3月17日(月) 正午から

カンファティ ☎ 050-3092-0051

「いっしょに狂言堂 in さくらプラザ」

8月2日(土) 午後2時開演

会場 戸塚区民文化センター さくらプラザ

お話し 山本東次郎

狂言2番

こども 500円 全席指定 2千2百円

チケット発売 5月26日(月) 正午から

カンファティ ☎ 050-3092-0051

「横浜狂言堂―かなつくホール編―」

令和8年2月8日(日) 午後2時開演

会場 かなつくホール

狂言「附子」(大蔵流) 山本則重

狂言「福の神」(大蔵流) 山本東次郎

お話し 山本東次郎

全席指定 2千2百円

チケット発売 11月17日(月) 正午から

カンファティ ☎ 050-3092-0051

日程・内容等が変更になる場合がございます。最新の情報は、横浜能楽堂ホームページをご確認ください。



さち

◆編集後記◆

長年会長を務めていただいた馬場洋一氏が退任され、令和6年度より、各流派2年の連番制で会長を務めることになりました。最初の会長に就任されたのは、巻頭言にもありますように宝生流・井上豊年氏です。新たな態勢の始まりです。このシテムにより、全理事が会長を支えつつ連盟の運営に取り組み姿勢がより強調され、横浜能楽連盟はさらなる進化を目指して動き始めました。

しかし、高齢化による会員減少など様々な問題はまだまだ山積しており、取り組むべき課題もたくさんあります。理事だけでなく、会員の皆様におかれまして、何かしらアイデアなどがありましたら流派の理事に声をかけていただき、連盟存続のためにもお力を貸していただけたらと思います。

今年も、観測史上稀にみるという寒さから始まりました。地震や異常気象、世界のあちこちで未だに終わらない紛争など、私達を取り巻く環境は相変わらず厳しい状況にあります。その中で少しでも、日々を穏やかに

楽しく過ごしていきたい... 謡がその一助となるよう、横浜能楽連盟は今年も活動を続けてまいります。
(F・Y)
*イラスト・鈴木幸江(観世流)

◎横浜能楽連盟ホームページ

アドレス(<https://yokohama-nohgakurenmei.jp/>)

連盟の紹介・行事案内・公演予定・幽玄バックナンバーなど、様々な情報をご覧いただけます。ぜひ一度開いてみてください。

なお、連盟加盟団体の方は「お問合せ」フォームからご連絡いただければ、大会情報などを掲載いたします。

◎横浜能楽連盟連絡先

◎事務局 尾崎

TEL 〇四二一七二五―七四四九

◎連盟後援行事

「第39回神奈川県宝生流謡曲大会」4月6日(日) 久良岐能舞台 / 「横浜宝生流連合会第38回謡曲大会」8月24日(日) 久良岐能舞台 / 「第39回神奈川県宝生流謡曲大会」4月6日(日) 久良岐能舞台 / 「横浜金剛会」第26回 謡曲と仕舞のつどい」8月23日(土) 川崎能楽堂